



佐藤春夫集

日本文学全集 27

日本文学全集 27 佐藤春夫集

昭和四十五年十一月一日発行

著者 佐藤春夫

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八  
電話東京二九一七六五一（代表）  
振替東京四一二三

本文整版 株式会社精興社  
本文印刷 多田印刷株式会社  
製本 株式会社鈴木製本所

佐藤春夫集 目次

田園の憂鬱

五

神々の戯れ

三

晶子曼陀羅

三七

お絹とその兄弟

三〇

女誠扇綺譚

三〇

女人焚死

四二

殉情詩集

四六

年譜

四一

人と文学

吉田精一 四〇

口繪写真撮影  
高村規

佐藤春夫集

詩文生涯

春愁に殊思下  
老をわを札たふ

孝文



## 田園の憂鬱

或は病める薔薇

*I dwell alone**In a world of moon,**And my soul was a stagnant tide,**Edgar Allan Poe*

私は、呻吟の世界で

ひとりて住んで居た。

私の霊は澁み腐れた潮であつた。

エドガア アラン ポオ

その家が、今、彼の目の前へ現れて来た。

初めのうちは、大変な元気で砂ぼこりを上げながら、主人の後になり前になりして、飛びまはり纏はりついて居た彼の二足の犬が、やうやう柔順になつて、彼のうしろに、二足並んで、そろそろ隨いて来るやうになつた頃である。

高い木立の下を、路がぐつと大きく曲つた時に、

「ああやつと来ましたよ」

と言ひながら、彼等の案内者である精毛あかびげの太つちよの女が、

片手で日にやけた額から滴り落ちる汗を、汚れた手拭で拭ひながら、別の片手では、彼等の行く手の方を指し示した。男のやうに太いその指の尖を伝うて、彼等の瞳の落ちたところには、黒つばい深緑のなかに埋もれて、目眩しいそれはそはした夏の朝の光のなかで、鈍色にとつしりや或る落着きをもつて光つて居るささやかな蒼葺の屋根があつた。

それが彼のこの家を見た最初の機会であつた。彼と彼の妻とは、その時、各この草屋根の上にさまよつて居た彼等の瞳を、互に相手のそのの上に向けて、瞳と瞳とで会話をした——

「いい家のやうな予覚がある」

「ええ私もさう思ふの」

その草屋根を見つめながら歩いた。この家ならば、何日か遠い以前にでも、夢にであるか、幻にであるか、それとも疾走する汽車の窓からでもあつたか、何かで一度見たことがあるやうにも彼は思った。その草屋根を焦点としての視野は、實際、何処でも見出されさうな、平凡な田舎の横顔であつた。而も、それが却つて今の彼の心をひきつけた。今の彼の憧れがそんなところにあつたからである。さうして、彼がこの地方を自分の住家に拵ととのんだのも、亦この理由からに外ならなかつた。

広い武蔵野が既にその南端になつて尽きるところ、それが漸おそく山国の地勢に入らうとする変化——言はば山国からの微かな余情を湛へたエビロオグであり、やがて大きな



野原への波打つプロオグでもあるこれ等の小さな丘は、目のとどくかぎり、此処にも起伏して、それが形造るつまらぬ風景の間を縫うて、一筋の平坦な街道が東から西へ、また別の街道が北から南へ通じて居るあたりに、その道に沿うて一つの草深い農村があり、幾つかの卑下つた草屋根があつた。それはTとYとHとの大きな都市をすぐ六七里の隣にして、譬へば三つの劇しい旋風の境目に出来た真空のやうに、世紀からは置きつ放しにされ、世界からは忘れられ、文明からは押流されて、しょんぼりと置かれて居るのであつた。

一たい、彼が最初にこんな路の上で、限りなく楽しんで、又珍らしく心のくつろいだ自分自身を見出したのは、その同じ年の暮春の或る一日であつた。こんな場所にこれほどの片田舎があることを知つて、彼は先づ驚かされた。しかもその平静な四辺の風物は彼に珍らしくあつた。ずつと南方の或る半島の突端に生れた彼は、荒い海と峻しい山とが激しく咬み合つて、その間で人間が微小にしかし賢明に生きて居る一小事の傍を、大きな急流の川が、その上に筏を長々と浮べさせて押合ひながら荒々しい海の方へ舞き合つて流れてゆく彼の故郷のクライマックスの多い戯曲的な風景にくらべて、この丘つづき、空と、雑木原と、田と、畑と、雲雀との村は、実に小さな散文詩であつた。前者の自然は彼の峻厳な父であるとすれば、後者のそれは子に甘い彼の母であつた。「帰れる放蕩息子」に自分自身をたとへた彼

は、息苦しい都会の真中であつて、柔かに優しいそれ故に平凡な自然のなかへ、溶け込んで了ひたいといふ切願を、可なり久しい以前から持つやうになつて居た。おお！そこにはクラシックのやうな平静な幸福と喜びとが、人を待つて居るに違ひない。Vanity of vanity, vanity, all is vanity! 「空の空、空の空なる哉都て空なり」或は然うでないにしても……いや、理窟は何もなかつた。ただ都会のただ中では息が屏つた。人間の重さで圧しつぶされるのを感じた。其処に置かれるには彼はあまりに鋭敏な機械だ、其処が彼をいやが上にも鋭敏にする。そればかりではない、周囲の騒がしい春が彼を一層孤独にした。「嗟、こんな晩には、何処でもいい、しつとりとした草葺の田舎家のなかで、暗い赤いランプの陰で、手も足も思ふ存分に延ばして、前後も忘れる深い眠に陥つて見たい」といふ心持が、華やかな白熱燈の下を、石畳の路の上を、疲れ切つた流浪人のやうな足どりで歩いて居る彼の心のなかへ、切なく込上げて来るものが、まことに腰であつた。「おお！深い眠、おれはそれを知らなくなつてからもう何年になるであらう？ 深い眠！ それは言はば宗教的な法悦だ。おれの今最も欲しいのはそれだ。熟睡の法悦だ。即ち肉体がほんとうに生きてゐる人の法悦だ。俺は先づそれを求める。そののある処へ行かう。さあ早く行かう！」彼は自分自身の心のなかでさう呟いた。或は、口に出してさへ呟いた。さうして矢も楯もたまらない、郷愁に似たやうな名づけや

うのない心が、その何処とも知れない場所へ、自分自身を連れて行けとせがむのであつた……。(彼は老人のやうな理智と青年らしい感情と、それに子供ほどの意志とをもつた青年であつた。)

その家が、今、彼の目の前に現れて来たのである。

道の右手には、道に沿うて一条の小渠があつた。道が大きく曲れば、渠もそれについて大きく曲つた。そのなかを水は流れて行き流れて来るのであつた。雑木山の裾や、柿の樹の傍や、既の横手や、藪の下や、桐畑や片隅にぼつかり大きな百合や葵を咲かせた農家の庭の前などを通つて。幅六尺ほどのこの渠は、事實は田へ水を引くための灌漑であつたけれども、遠い山間から来た川上の水を真直ぐに引いたものだけに、その美しさは溪と言ひ度いやうな気がする。青葉を透して降りそそぐ日の光が、それを一層にさう思はせた。へどろの楮土を洒して、洒し尽して何の濁りも立てずに、浅く走つて行く水は、時々ものに堰かれて、ぎらりぎらりと柄になく閃いたり、さうかと思ふと縮緬の皺のやうに繊細に、或は或る小さなびくびくする縮緬の発作のやうに光つたりするのであつた。或は、その小さな輝きが魚の鱗のやうに重り合つて居るところもあつた。涼しい風が低く吹いて水の面を滑る時には、其処は細長い瞬間的な銀箔であつた。薄だの、もう夙くにあの情人にものを訴へるやうなセンチメンタルな白い小さい花を失つた野茨の一片かたまりの藪だの、その外、名もない併しそれぞれの花や実

を持つ草や灌木が、渠の両側から茂り合ひかぶさりかかると、水はそれらの草のトンネルをくぐつた。さうしてその影を黒く涼しく浮べては、ゆるゆらと流れ去つた。或る時には、水はゆつたりと流れ淀んだ。それは旅人が自分の来た方をふりかへつて佇むのに似て居た。そんな時には土耳古玉のやうな夏の午前の空を、土耳古玉色に——或は側面から透して見た玻璃板の色に、映して居るのであつた。快活な蜻蛉は流れと微風とに逆行して、水の面とすれすれに身軽く滑走し、時々その尾を水にひたして卵を其処に産みつけて居た。その蜻蛉は微風に乘つて、しばらくの間は彼等と同じ方向へ彼等と同じほどの速さで、一行を追ふやうに従うて居たが、何かの拍子について空ざまに高く舞ひ上つた。彼は水を見、また空を見た。その蜻蛉を呼びかけて祝福したいやうな子供らしい気軽さが、自分の心に湧き出るのを彼は知つた。さうしてこの楽しい流れが、あの家の前を流れて居るであらうことを想ふのが、彼にはうれしかつた。

劇しい暑さは苦しい、楽しい、と表現しようとして木の葉の一枚一枚が宝玉の一断面のやうに輝くと、それらの下から蟬は焼かれて居るやうに呻いた。灼けた太陽は、空の真中近く昇つて来て居た。併し、彼の妻は、暑さをさほどには感じなかつた。併し、彼の妻から暑さを防いだものは、その頭の上の紫陽花色に紫陽花の刺繍のあるバラソル——貧しい婦の天蓋——ではなかつた。それは彼の女の物思ひ

であつた。彼の女は今歩きながら考へ耽つて居る、暑さに身に感じる閑もないほど。彼の女は考へた——さうすれば今間借りをして居る寺のあの西日のくわつと射し込む一室から涼しいところへ脱れられる。それよりもあの下卑た俗悪な慾張りの口うるさい梵妻の近くから脱れられる。さうして、静に、涼しく、二人は二人して、言ひたい事だけは言ひ、言ひたくない事は一切言はずに暮したい住みたい。さうすれば、風のやうに捕捉し難い海のやうに敏感すぎるこの人の心持も気分も少しは落着くことであらう。あれほどの意気込みで田舎を憧れて来ながら、僅ながらもわざわざ買つて貰つた自分の畑の地面をどう利用しようなどと考へて居るでも無く（それはもとよりさうであらうとは思つたけれども）それよりも本一行見るではなく字一書かうとするでもなく、何一つ手にはつかぬらしい。さうして若しそんな事でも言ひ出せばきつと吐鳴りつけるにきまつて居る、それでなくてさへも、もう全然駄目なものと見放されて居る——わけて自分との早婚すぎる無理な結婚の以後は、殊にさう思はれて居るらしい父母への心づかひもなく、ただうかうかと——ではないとあの人自身では言つても、とにかくうかうかと、その日その日の夢を見て暮して居るのである。何時、建てるものとのない家の凶面の、而も実用的といふやうな分子などは一つも無いものを何枚も何十枚も、それは細かく細かく描いて居るかと思ふと、不意に庭へ飛び出して、犬の真似をして犬と一緒にやつて、

燃えて居る草いきれの草原を這つたり駆けまはつたり、さうかと思ふと突然破れるやうな大声で笑ひ出したり叫び出したりするこの人は、ほんとうに何か非常に寂しいのであらう。何事も自分には話してくれはしないから解る筈もない。何か自分には隠して居るのではなからうか……。彼の女は、五六日前に読み了つた藤村の「春」を思ひ出した。單純な彼の女の頭には、自分の夫の天分を疑うて見ることなどは知らずに、自分の夫のことをその小説のなかの一人が、自分の目の前へ——生活の隣りへ、その本のなかから抜け出して来たかのやうにも思つて見た……。あれほど深い自信のあるらしい芸術上の仕事などは忘れて、放擲して、ほんとうにこの田舎で一生を朽ちさせるつもりであらうか。この人は、まあ何といふ不思議な夢を見たがるのであらう……。それにしても、この人は、他人に対しては、それは親切に、優しく調子よくしながら、何故かうまで私には氣難かしいのであらう。若しや、あの人のある女に対する前の恋がまだ褪せきらない間に、私はあの人の胸のなかへ這入つて行つて、そのためにあの人はしばらくはあの女を忘れては居たけれども、根強く残つて居たあの恋が何時の間にか再び自分をのけものにしてまた芽を出したのではなからうか。さうして私には辛くあたる……。今のままで、さぞかし当人も苦しいであらうが、第一そばに居るものがたまらない。返事が氣に入らないといつては転ぶほど突きとばされたり、打たれたり、何が氣に入らないのか二日も

三日も一言も口を利かうとはしなかつたり……。あの人はきつと自分との結婚を悔いて居るのだ。少くとも若し自分とはなく、あの女と一緒に住んで居たならばどんなに幸福だつたらうかと、時々、考へるに違ひない。考へるばかりではない、現に、自分にむかつてさう言つたことさへある——「あの時、おれがああ女、あの純潔な素直な娘と一緒になれさへしたならば、あの人が私をよく統一して、おれは今ごろ、いろいろな意味でもつと美しいもつと善い生活が出来て居ただらうに」と……。實際あんな女は、自分も知つて居るけれども、自分などよりはもつと美しく、もつと優しい。私はあんな女をどんなに深く思つて居るかはよく知つて居る……いや、いや、さうではない。あの人はやつぱりあの人自身で何か別のことを考へ込んで居るのである……。さうだ、夫は、「ただ、私をそつとして置いてくれ」と言つた……

ふと、

「俺には優しい感情がないのではない。俺は唯それを言ひ現すのが恥しいのだ。俺はさういふ性分に生れつゝいたのだ」

彼の女は、昨夜、いつになく打解けて彼が語つた時、彼の女にむかつて言つた彼の女の夫の言葉を思ひ出すと、その言葉を反芻しながら歩いた。さうして未だ見たことのない家の間どりなどを考へた。たとひ新婚の夢からはとつくに覺めたころであつても、こんな暑さの下でも、ただ単

に転居するといふだけの動機で心持がふだんよりもずつと活き活きとして来て、こんなことを考へて悲しんだり、喜んだり、慰んだりすることの出来るのは、まだ世の中を少しも知らない幼妻の特権であつたからだ。さうしてそれがまた、あの案内の女が、喋りつづけに喋つて居るその家の由来に就て、何の興味も持たぬらしく、ただ無愛想に空返す事を与へて居るに過ぎなかつた所以でもある。——この案内の女は、その長い暑苦しい道の始終を、ながながと喋りつづけて休まなかつた。この女は自分の興味をもつて居るほどの事なら、他の何人にとつても、非常に面白いのが当然だと信じて居る單純な人々の一人であつたから。

こんな道を、彼等は一里近くも歩いた。

さうしてその家は、もう、彼等一同の目の前に来てゐた。家の前には、果して渠が流れて居た。一つの小さな土橋が、茂るがままの雑草のなかに一筋細く人の歩んだあとを残して、その上を歩く人々に、あの幅一間あまりの渠を越させて、人々をその家の入口へ導く。

入口の左手には大きな柿の樹があつた。さうして奥の方にもあつた。それらの樹の自由自在にうねり曲つた太い枝は、見上げた者の目に、「私は永い間にここに立つて居る。もう実を結ぶことも少くなつた」とその身の上を告げて居るのであつた。その老いた幹には、大きな枝の脇の下に寄生木が生えて居た。その樹に対して右手には、その屋敷とそれの地つづきである桐畑とを区限つて細い溝があつた。

何の水であらう。水が滲れて細く——その細い溝の一部分を尚細く流れて男帯よりもつと細く、水はちよろちよろ喘ぎ喘ぎ通うてゐた。じめじめとした場所を、一面に空色の花の月草が生え茂つて居た。また子供たちが「こんべたう」と呼んで居るその菓子形のをした仄赤く白い小さな花や、又「赤まんま」と子供たちに呼ばれて居る野花なども、その月草に雜つて一帯に蔓つて居た。それはなつかしい幼な心をよびさます叢であつた。昼間は螢の宿であらう小草のなかから、葉には白い堅の縞が鮮に染め出された蘆が、すらりと、十五六本もひとところに集つて、爽やかな長いそのうへ幅広な葉を風にそよがせて、ざわざわと音をたてて居るのであつた。屋敷の奥の方から流れ出て来た水は、それらの小草の茎をくぐつて、それらの蘆の短い節々を洗ひきよめながら、うねりうねつて、解きはぐした絹糸の束のやうにつやつやしく、なよやかに揺れながら流れた。さうして、か細く長々しい或る草の葉を、生えたまままで流し倒して、その草のために一時流動することをさへぎられたそれらのささやかな水は、その草の葉を伝うて、より大きな道ばたの渠のなかへ、水時計の水のやうにぼたりぼたりと落ち濺いで居た。彼にはこの家の屋後に、湧き立つ小さな清新な泉がありさうにも感ぜられた——さういふ地勢でもあつたから。

家の背後は山つづきで竹藪になつて居た。竹のなかには素晴しく大きな丈の高い椿が、この清楚な竹藪のなかの異

端者のやうに、重苦しく立つて居た。屋敷の庭は丈の高い——人間の背丈よりも高くなつた櫛の生垣で取り囲まれてあつた。家全体は、指顧の遠さで見た時にさうであつた如く、目の前に置かれて見ても、茂るにまかせた樹々の枝のなかに埋められて、茂るにまかせた草の上に置かれてあつた。

犬は一疋づつ土橋の側から下りて行つて、灌水の水を交交に味うた。

彼はその土橋を渡らうともせず、**「三徑就荒」と口吟**みたいこの家を、思ひやり深さうにしばらく眺めた。

「ねえ、いいぢやないか、入口の氣持が」

彼はこの家の周囲から閑居とか隠棲とかいふ心持に相應した或る情趣を、幾つか拾ひ出し得てから、妻にむかつてかう言つた。

「然うね。でも随分荒れて居ること。家のなかへ這入つて見なければ……」

彼の妻は少々不安さうに、又さかしげに、氣まぐれな夫をたしなめる時にすべての妻がする口調をもつてさう答へた。併し、すぐ思ひかへして、

「でも、今のお寺に居ることを思へば、何処だつていいわ」  
今飲んだ水から急に元氣を得た二疋の犬は、主人達よりも一足さきに庭のなかへ跳り込んだ。松の樹の根元の濃い樹かけを択んだ二疋の犬どもは、わがもの顔に土の上へ長長と身を横へた。彼等は顔を突き出して、下顎から喉首の

ところを地面にべつたりと押しつけ、両方から同じ形に顔を並べ合つた。さうして全く同じやうな様子に体を曲げて、後脚を投げ出した様子は、まことに愛らしいシンメトリーであつた。赤い舌を垂れて、苦しげな息を吐き出し乍ら、庭に這入つて来た彼等の主人達の顔を無邪気な上眼で眺めて、静かに楽しさうに尾を動かして見せた。いかにも落着いたらしいその姿は、此処がもう自分たちの家だといふ事を、彼等の主人たちよりさきに十分に予覚して居るらしいやうにも、彼には見られるのであつた。若しこの時、妻が彼のそばに居たならば彼は妻にかう言つたらう――

「ね、フラテもレオ（二つとも犬の名）も賛成してゐるよ」  
けれども彼の妻は、案内の女と一緒にその縁側の永い間閉ざされて居た戸を開けようとして、鍵で鍵穴をがたがた言はせて居る。

樹といふ樹は茂りに茂つて、縁は幾重にも積み重つた。錯雑した枝と枝とは網の目になり壁になり軒になつて、庭はほとんど日かげもさし込まなかつた。土の匂は黒い地面から、冷々と湧いて来た。彼は足もとから立ちのぼるその土の匂を、香を匂ふ人のやうに官能を尖らせて沁み沁みと味うて見た――ぢやらぢやらと涼しく音を立てて居た鍵束の音がやまつて、縁側の戸が開けられるまで。

「やつと、家らしくなつた」

昨日、門前で洗ひ浄めた障子を、彼の妻は不慣れな手つきで張つたのである。最後の一枚を張り了つた時、それを茶の間と中の間のあひだの敷居へ納めようとして立つて居る夫の後姿を見やりながら、妻は満足に輝いてさう言つた。「やつと家らしくなつた」彼の女は同じ事を重ねて言つた。「畳は直ぐかへに来るといふし……。でも、私はほんとうに厭だつたわ、をとつひ初めてこの家を見た時にはねえ。こんな家に人間が住めるかと思つて」

「でも、まさか狐狸の住家ではあるまい」

「でもまるで浅茅が宿よ。でなけや、こほろぎの家よ。あの時、畳の上一面にびよんびよん逃げまはつたこほろぎは、まあどうでせう。恐しいほどでしたわ」

「浅茅が宿か、浅茅が宿はよかつたね。……おい、以後この家を兩月草舎と呼ぼうぢやないか」

（彼等二人は――妻は夫の感化を受けて、上田秋成を讚美して居た。）

夫の愉快げな笑ひ顔を、久しぶりに見た妻はうれしかつた。

「そこで、今度は井戸換へですよ、これが大変ね。一年もまるで汲まないといふのですもの、水だつて大がいが腐りますわねえ」

「腐るとも、毎日汲み上げて居なければ、俺の頭のやうに腐る」

この言葉に、「又か」と思つた妻は、今までののはしやい

だ調子を忘れておぼおぼと夫の顔を見上げた。しかし夫の今日の言葉はただ口のさきだけであつたと見えて、その骨ばつた顔にはもとのままの笑があつた。それほど彼は機嫌がよかつたのである。それを見て安心した妻は甘えるやうに言ひ足した。

「それに、庭を何とかして下さらなげやあ。こんな陰気なのはいや！」

疲れて壁にもたれかかつた妻の膝には、彼と彼の女との愛猫が、しなやかにしのび寄つてのつそりと上つて居るところであつた。

「青(猫の名)や。お前は暑苦しいねえ」

と言ひながらも、妻はその猫を抱き上げて居るのである。彼の家庭には犬が居る。猫が居る。一たん愛するとなると程度を忘れて溺愛せずには居られない彼の性質が、やがて彼等の家庭の習慣になつて、彼も彼の妻も人に物言ふやうに、犬と猫と言ひかけるのが常であつた……。

彼等夫婦がこの家に住むやうになつた日から、遡つて数年の前である——

この村で一番と言はれて居る豪家N家の老主人は、年をとつて、ひどく人生の寂寞を感じ出した。普通人にとつてかういふ時に最も必要なものは、老いと若きとを問はず異性であつた。さうして、この老人は、都会から一人の若い

女を連れて来た。この豪家は、この風流人の代にその田の半分を無くしたのだけれども、流石に老人の考へは金持らしいものであつた——ただ美しいだけで、何の能もないやうな女はつれて来なかつた。少し位は醜くとも、年さへ若ければ我慢するとして、村の爲めにもなり、それよりも自分の経済の爲めにもなるやうな女を扱んだのであつた。一口に言へば、彼は、今までは村に無くて不自由をして居た産婆を副業にする妾を蓄へたのだ。それから自分の家の離れ座敷をとり外して、彼の屋敷からはすぐ下に当るところへ、それを建て直した。冬には朝から夕方まで日が当るやうな方角を考へて、四間の長さをつづく縁があつた。玄關の三畳を抜けて、六畳の茶の間には炉を切らせた。黒柿の床柱と、座敷の欄間に嵌込んだ麻の葉つなぎの棧のある障子の細工の細かさは、村人の目をそば立たせた。さすがはうちの山から一本折りに折つて伐り出した柱だ、目ざはりな節一つない、と大工はその中古の柱を愛撫しながら自分のもののやうに褒めた。さうして農家の神々しいほど広い土間のある、太い棟や梁の真黒く煤けた台所とは変つて、その家には、板をしきつめた台所に、白足袋を穿いて、ぞろぞろ衣服の裾を引摺つた女が、そこで立働くやうになつた。老人は、その家督を四十幾つかになつた自分の長男に譲つた。さてこの老人は幸福であつた。村の人々は、自分の年の半分にも足らぬ若さの茶香友達を得た隠居に就てかけ口を利いた。併し、そんな事位は隠居の幸福を傷けはし

なかつた。

けれども、併しすべての平和と幸福とは、短い人生の中にあつて最も短い。それはちやうど、秋の日の障子の日向の上にふと影を落す鳥かげのやうである。つと来てはつと消え去る。さうして鳥かげを見た刹那に不思議なさびしさが湧く。老人のこれ等の平和の日も束の間であつた。

若い妾は、程なく、都会から一人の若い男を誘うて来た。村の人々は、この若い男を「番頭さん」「お産婆の番頭さん」と呼んだ。村の人々は産婆には、果して「番頭さん」が入用なものでどうかを知らなかつた。さうしてこの隠居は、自分の若い妾が、自分には無断で、若い「番頭さん」を雇入れた事に就て不満であつた。非常に不満であつた。第一にこの若い男女の生活は田舎の人々の目には贅沢すぎた。隠居の予算と少し違ひすぎた。隠居は彼等がもつとつつましやかであり得る筈だと考へ初めた。その事を彼の妾に度々言ひつけた。初めは遠まはしに遠慮勝ちに、併しだんだん思ひ切つて言ふやうになつた。或る夜には夜中言ひ募ることがあつた。「番頭さん」は多分これ等の對話を壁一重に聞いただらう。或るそんな夜の後の日に——彼の女が初めて村へ来てから一年ばかりの後、若い「番頭さん」を若い妾が「雇入れ」てから半年ほどの後、或る夕方、彼等二人の男女の姿は、突然この村から消えた。夕方に村の方から帰つて来た馬方は、山路の夕闇のなかで、くつきりと浮上つて白い丸い頬が目についたので、よく見ると「N

さんのお産婆」だつた、とその次の朝村の人々に告げた。併し、これは多分、この男が実際にこれを見たわけではなく、彼等が居なくなつたと聞いた時に、思ひついた嘘であつたかも知れない。でなければ彼は帰つて来ると直ぐその事を、珍らしげに、手柄顔に言ふべき筈だからである。人はこんな時に、ちよつとこんな事を言つて見たいやうな一種の芸術的本能を、誰しも多少持つて居るものである。——それはどうでもいいとして、この話は、話題に饑えて居る田舎の人々を喜ばせた、当分の間。さうして二十八の女には、七十に近いあの隠居よりは、二十四五の若者の方がよく釣合ふべき筈だつたといふのが、村の輿論であつた。痛ましいのは、若い妾に逃げられたこの隠居が、その後、

植木の道楽に没頭し出した事である。彼は花の咲く木を庭へ集め出した。今日はあの木をこちらに植ゑ変へ、昨日は別の庭からこの木を自分の庭にうつした。さうして明日は何かよい木を捜し出さねばと、毎日、土いぢりに寧日がなかつた。春には牡丹があつた。夏には朝顔があつた。秋には菊があつた。冬には水仙があつた。さうして、彼の逃げて仕舞つた妾の代りに、二人の十と七つとの孫娘を、自分の左右に眠らせた牀のなかで、この花つくりの翁は眠り難かつた。彼は月並の俳諧に耽り出した。

隠居は死んだ、それから丁度一年経つた後に。彼は、かうして集めた花の木のそれぞれの花を僅かばかり楽しんで



ばかりであつた。さうしてその家は、彼の末の娘と共に村の小学校長のものになつた。村の校長はこの隠居の養子だつたからである。すると抜目のない植木屋があつて、算術の四則には長けて居り、それを実の算盤に応用することに巧みであつたけれども、美に就ては如何なる種類のそれにも一向無頓着な、当主の小学校長をたぶらかして、目ぼしい庭の飾りは皆引抜いて行つた。大木の白木蓮、玉椿、檜、海棠、黒竹、枝垂れ桜、大きな花栂榴、梅、夾竹桃、いろいろの種類、蘭の鉢。さうしてそれ等の不幸な木はかくも忙しくその居所を交へなければならなかつた。土に慣れ親しむ暇もなかつた。かうしてそれ等のうちの或るものは、為めに枯れたかも知れない。

小学校長は、ちやうど新築の出来上つた校舎の一部へ住んだ。自分の貰つたこの家は空家にして置いた。さうして居るうちにこの家を借り手があれば貸したいと考へ出して住む人が無ければ、家は荒廢するばかりである。たとひ二円でも一円五十銭でも、家賃をとつて損になることはない、と校長先生の考は極く明瞭である。ところが、田舎では大抵の人は自分自身の家を持つて居る。たとひ軒端がくづれて、朽ち腐つた藁屋根にむつくりと青苔が生えて居るやうな破家なりとも、親から子に伝へ子から孫に伝へる自分の家を持つて居た。どんな立派な家にしろ、借家をして住まねばならないやうな百姓は、最後の最後に自分の屋敷を抵当流れにしてしまつた最も貧しい人々に決つて居た。かく

て、あの隠居が愛する女のために、又自分の老後の楽しみにと建てたこの家は実に貧しい貧しい百姓の家に化してしまつたのである。隠居が茶の間の茶釜をかけた炉には、大きないぶり勝ちな松薪が、めちやめちやに投込まれて、その煙は田舎家には無駄な天井に邪魔されて、家から外へ抜けて行く路もなかつた。さうして部屋を形造つた壁、障子、天井、畳は直ぐに煤びて来た。気の毒な百姓の一家は立籠つた煙などを苦にしては居られない。反つてそれから来る温さに感謝して、秋の、冬の長い夜な夜なを、繩を纏うたり、草鞋を編んだりして、夜を更かさねばならなかつた。家賃は四月目五月目位から滞り出した。畳はすり切れた。柱へはいろいろな場合のいろいろな痕跡がいろいろの形に刻みつけられた。「せめては下肥位はたまらう」と校長先生が考へたにも拘はらず、校長先生の作男が下肥を汲みに行く朝は、其処は何時もからつぽだつた。何となれば家の借り手の貧しい百姓が、自分の借りて居る畑へそれを運んでしまつた後であつたから。校長先生はひどくこの借家人を悪く思ひ初めた。会ふほどの人には誰彼となく、貧乏な百姓の狡猾を罵り、訴へた。さうして「どうせ貧乏する位の奴は、義理も何も心得ぬ狡猾漢だ」といふ結論を与へ去つた。外の村人は、直ぐ校長先生の意見に賛同の意を示した。そこで校長先生は自分の論理が真理として確立されたのを感じ出した。次には、こんな男に家を貸して置くよりも、寧ろ荒れるにまかせて置いた方がどれほどよいか